

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：健康・スポーツ科学科

資格：教授

氏名：中西 匠

研究分野	研究内容のキーワード
体育科教育学	カリキュラム、運動部活動、組織運営、教科外体育
学位	最終学歴
教育学修士, 教育学士	広島大学大学院 教育学研究科 教科教育学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 「対話的まなびの指導」の指導方法の開発	2017年09月18日～現在	「保健体育科教材演習Ⅰ」において、保健体育科で「主体的で対話的な学び」を保障するための指導方法を、学生自身がグループワーク、ブレインストーミング、ディベート、ロールプレイングなどを実際に経験しながら、開発する手法を取り入れている。
2. 教員採用試験（中高保健体育）対策メール配信	2012年4月10日～現在	専門教養の特別講座の進捗に合わせて、毎日一問一答のメールを受験予定者に配信している。フォルダを作って電車の中など隙間時間に繰り返し学習できるよう工夫した。
3. 教員採用試験専門教養講座	2010年4月01日～現在	教員採用試験（中高保健体育）受験予定者を対象に、専門教養筆記試験対策を講じている。3年後期に体系的な学習を行った後、4年前期では受験する自治体の過去問を中心に実施している。
4. ミニレポートの活用による教員⇄学生、学生⇄学生 のコミュニケーションの促進	2010年04月～現在	授業終了時に授業内容に関わる100字程度のミニレポート（総括・疑問・意見など）を提出させ、特徴的なものを取り上げて通信としてまとめ、次の授業時に配布する。前回の復習とともに、学生間のコミュニケーションツールとして有効。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪府体育科教員指導支援事業スーパーアドバイザー	2014年06月～現在	大阪府立大塚高等学校 摂津高等学校の体育科の授業・部活動の実践を実際に観察し、助言を行った。第146回学校体育研究同志会全国研究大会（於ウェスティンホテル淡路）において、基調提案「すべての子どもたちに豊かな運動文化を」を行なった。子ども・体育を取り巻く情勢を踏まえ、研究会の理論的・実践的到達点を確認し、子どもの生きる力につながる体育・健康教育実践の在り方を問うた。西宮市立小学校教科等研究会体育部会への研究・実践に継続的に関わり、年二回の授業研究の参観・データ収集と解析など、授業や教材づくりに関する助言を継続的に行っている。
2. 学校体育研究同志会全国大会基調提案	2013年8月	
3. 西宮市立小学校教科等研究会体育部会への助言	2012年04月～現在	
4 その他		
1. 陸上競技部部长・監督	2010年～現在	
2. 関西学生陸上競技連盟 評議員	2000年04月01日～現在	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要

1 資格、免許		
1. 高等学校教諭一級普通免許状(保健体育)	1985年03月	
2. 小学校教諭一級普通免許状	1985年03月	
3. 中学校教諭一級普通免許状(保健体育)	1985年03月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり	共	2018年3月23日	創文企画	石田智巳、伊藤嘉人、大貫耕一ほか 第1部第2章5子どもの学び合いを促す学習カードの原理担当 p.60-63 子どもによる課題の発見・追求と、教師による内容構成・指導性を統一的に追求するための教具として学習カードを捉え直し、①課題の発見②課題解決手段の検討と決定という二つの視点で、具体的なカードを事例に、記述内容、枠組みの捉え方、さらに活用の仕方を解説した。
2. 対話でつくる教科外の体育 学校の体育・スポーツ活動を学び直す	共	2017年10月30日	学事出版	神谷拓 玉腰和典 矢部英寿 久保田治助 中西匠 小山吉明 伊藤嘉人 石田智巳 制野俊弘 堀江なつ子 星野実 大谷滯 第3章児童会・生徒会を通じたスポーツの振興 2生徒会・体育委員会によるスポーツ活動の考え方 PP77-87 を担当。生徒会体育委員が主導するスポーツ活動の教育価値、実践課題を「自由(有志)参加を公的に支える」という視点から解説した。委員会によるスポーツ活動の教育価値としては①多様なスポーツ要求に応える②有志文化の醸成③自治的なスポーツ活動の在り方を具体的に学ぶ④支えるスポーツの感動を経験する、の4点を挙げ、体育授業とのかかわりを保ちながら、生徒の主体性を保障するような指導することの重要性を論じた。
3. 中村敏雄著作集4 部活・クラブ論	共	2009年02月	創文企画	中西匠 森敏生 中村敏雄氏の膨大な運動部活動・クラブに関する論考を精選し、体系的に構成して構造的に理解できるように編集した。解説では、①中村がクラブ論を論じる際の基本的なスタンス②スポーツ発展の母体としてのクラブ観とクラブの根本原則③スポーツの主体者形成を目指す学校教育全体のなかでのクラブの位置づけ④今日の情勢における中村部活論の可能性について論じた。
4. 最新スポーツ科学事典	共	2006年09月	平凡社	會田宏、阿江美恵子、阿江通良他約400名 日本体育学会創立60周年記念事業として、これまでの研究成果の全てを網羅すべく総力をあげて取り組み、最新の知見や情報を取り組んで刊行した事典。各専門分委会から提示された学術用語をもとに大項目を選定し、それに関連する小項目を網羅した。中西は、大項目「教科外体育」とその小項目を担当。
5. 教師と子どもが創る体育・健康教育の教育課程試案(1)	共	2003年08月	創文企画	岩崎英夫・海野勇三・大貫耕一・大宮とも子・鐘ヶ江淳一・口野隆史・久保健・黒野佐智子・澤豊治・塩貝光生・制野俊弘・岨和正・堤吉郎・殿垣哲也・中瀬古哲・中西匠・中村ひとみ・成瀬徹・西口和代・原通範・平野和弘・福川斉・前田雅章・丸山真司・三浦正行・森敏生・安武一雄・矢部英寿・吉田隆 「第4章 教科外スポーツ」を分担執筆した。子ども・スポーツの今日的状況の中での「教科外スポーツ(スポーツ行事や運動部活動)」の重点的な教育目標を、スポーツ分野の組織・運営能力の育成とし、目標達成の為の方法を具体的な実践事例の検討から、発達段階に応じて導出した。体育の授業や地域・民間でのスポーツ経験などとの関連を追及し、総体的なスポーツ活動として取り組む事の重要性を強調した。担当 (pp.155~170)
6. 子どものからだと心、健康教育大事典	共	2001年07月	旬報社	藤田和也・数見隆生・久保健・他 幼児教育、小学校教師を対象とした健康教育の事典。体育・健康教育領域の基本的な概念の説明と、発達段階やねらいに応じた具体的な指導方法などを体系的に網羅した。基本的な概念の説明の「スポーツ」「体育」「プレイ(プレイ教育)」を担当。いずれについても、専門的な言い回しを避け、教育現場での実践課題と結びつけやすいかたちで概念を説明した。担当 (pp.581~581, pp.603~603, pp.653~654)
7. 情報系体育科教育研究の系譜	共	1994年03月	新体育社	乾、橋本、坂本、佐野、亀丸、川西、安藤、毛、長崎、中西、丸山、口野、森、綿引、松岡、中瀬古 本研究では、子ども・青年のスポーツの実態・意識の調査を通してスポーツの主体者形成の課題を明らかにしようとした。その結果、①技能習熟、勝敗などに「こだわらない」「やさしく」「楽に」というスポーツ意識が広まっている、②これらの傾向は、学校体育の「成果」として「あきらめ」とともに形成されていると考えられ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
8. 子どもの自立と授業の科学	共	1991年02月	溪水社	る、などの点が明らかになった。これらの実態を踏まえ、体育科教育の内容を構想する必要性を提起した。(pp.163-177) 有馬、石川、小柳、庄井、住野、恒吉、中瀬古、中西、中村、林、藤井、松田、松岡、山本敏郎、仏円、山本理絵 本論考では、人格構造論に学び、子どもが学力を形成しつつ自立を実現する授業のあり方を明らかにしようとした。学力形成を自立に結びつける鍵として「世界観」形成があるが、その本質的屬性として①現実をリアルに反映していること②体系的なこと③価値観を反映していること④立場を自覚していることこの4点をあげた。これらの観点を、高校生を対象とした「環境問題を考える」という「総合学習」的实践を手がかりに、実践的に検討した。(pp.65-80)
2 学位論文				
3 学術論文				
1. 陸上競技とスポーツテクノロジー	単	2018年7月1日	「たのしい体育・スポーツ」2018年夏号 通巻308号	陸上競技の支えるテクノロジーの進化について、短距離走に焦点を当てて論考した。「スタートにおける平等性の確保」「不正スタートの発見」「素早く正確な計時」「コンディションの安定化」という観点からテクノロジーの進化の過程と現状を明らかにし、競技者の競技力の向上と安全を中心に、審判や観客などがより快適に陸上競技にかかわり、楽しめる方向でのさらなる進化を展望した。
2. 走り幅跳びの指導のポイント	単	2016年10月1日	「たのしい体育・スポーツ」2016年秋号 通巻301号	授業における走り幅跳びの指導のポイントを、技術構造・重点課題をふまえた上で以下の5点提起して解説した。①子どもたちの感性を大切に(低学年)②歩数を意識してスピードとリズムのコントロール(助走)③最後の1歩を小さく速く(踏み切り準備)④踏み切り位置を見ないこと(踏み切り)⑤動きを意識してねらい幅跳びで動きの習熟 加えて、異質集団による教えあい、他の種目とのクロスカリキュラム、ICTを含む新しい教具の開発などの重要性を指摘した。
3. バディシステムを用いたスキー実習が女子大学生の社会的スキルに及ぼす影響：問題解決因子およびコミュニケーション因子の変化に着目して(査読付)	共	2016年03月25日	健康運動科学 第6巻 第1号	松本裕史 中西匠 西田順一 柳敬晴 女子大学生対象に参加者同士のコミュニケーションを必要とするバディシステムを用いてスキー実習が社会的スキルに及ぼす影響を検討した。その結果、問題解決因子得点の実習参加前後での優位な増加が認められた。すなわちバディシステムを用いたスキー実習が女子大学生の社会的スキルを向上させる可能性が示唆された。
4. 若い教師のトライアル実践と力量形成	単	2015年1月	「たのしい体育・スポーツ」2015年1.2月合併号	四海久富氏の実践記録「学習形態を工夫した障害走の授業(小6)」を題材に、若い教師がトライアル実践(必ずしも十分な見通しが持てなくても先行実践や理論的蓄積に学びながら授業を展開する)を行なうことが、いかに教師の力量形成に結びつくか、検討した。その結果①先行実践や理論の学習と、実践(現場)を往還すること②子どもの声に耳を傾け、授業や教材を改善していくこと③授業メモ、通信、実践記録を書くことにより実践課題を明確にしていくこと、の3点に鋭異様な意義があるということが明らかとなった。
5. アスリートとスポーツの価値を守る-ドーピングの実態と予防策-私たちの課題-	単	2014年07月	「たのしい体育・スポーツ」2014年7.8月合併号	陸上競技の領域を事例に、ドーピングの実態とその予防策について考察した。近年ドーピングはますます多様化・巧妙化・組織化しており、WADAを中心とする反ドーピング機構とのいちごっこが続いている。アスリートは自分自身とスポーツの価値を守る運動として、積極的にドーピングチェックに参加すること、学校現場において子どもたちを対象に体育理論などでドーピング問題を体系的に学ばせることを課題として提案した。
6. 大塚提案をうけて	単	2013年12月	「体育科教育」大修館書店 第61巻12号	特集「ハードル走の授業を変える」における大塚光雄氏の問題提起「ハードル走の授業をこう変えていく」を受けた紙上シンポジウムの一環として、ハードル走の授業の実践課題を検討した。(1)ハードルの高さに着目する(2)「ハードルの近くに着地する」というイメージの意義(3)ロスタイムの評価の重要性を指摘し、(1)走運動(リズム走)としてハードル走を捉える(2)平面ハードルから立体ハードルへのグラデーション(3)多様なリズムのバリエーションの3点を課題として提案した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 運動会の教育的価値と実践課題-実践事例から読み解く-	単	2013年07月	学校体育研究同志会研究年報「運動文化研究」第30号	実践記録として公表されている運動会の実践事例を分析し、運動会の教育価値を(1)スポーツの組織・運営を自治的に学ぶ場(2)スポーツを中心とする総合的な学習の場(3)体育授業の発展の場(4)縦-ヨコの関係の広がりや時間的限定による感動の共有(5)学校と地域の結びつけの6点を整理し、実践課題として(1)発達段階を踏まえた自治の育成(2)指導→支援→自治という段階的関わり(3)ミニ行事と全員参加行事の関連づけ(4)演技の定番づくりとリメイクの4点を提案した。
8. 保健体育科教員をめざす大学生たちは何をどう学んでいるのか-武庫川女子大学の事例	単	2013年01月	「たのしい体育・スポーツ」2013年1.2月合併号	武庫川女子大学のカリキュラムを事例に、大学における保健体育科教員の教員養成の在り方について考察した。教員への動機づけ→総合的な講義→指導法の演習→教育実習事前指導→教育実習→ゼミ活動という形で、教育現場とのつながりを確保しつつ総合的かつ実践的に教員養成を進めることが極めて重要であることを確認した。
9. 授業「スキー実習」における教え合いの活性化-パディシステムの導入とリフトでの学習カードの活用-(査読付)	共	2011年12月	健康運動科学 第2巻 第1号	中西匠・松本裕史 体育の授業では、学習者どうしの教え合いが、技術認識と技能習熟の統一、自律的学習の促進、学習者のコミュニケーションスキルの向上に重要な役割を果たす。スキー実習では、指導者と少人数のグループによる講習がおこなわれるが、伝達-受容型のマニュアルは整備されているものの、学習者どうしの教え合いを促進させる方法論は未熟である。本研究では、学習者にペアを組ませ、講習セッションごとにペアを組みかえるパディシステム、リフトで移動する際に学習カードを活用しながらペアで教え合うという方法を導入し、学習者間の教え合いの活性化を試みた。実践の結果、学習者の教え合いは促進され、学習者もこの方法を肯定的に評価しており、この方法の有効性が明らかになった。
10. 大学出身女性アスリートの実態と『好循環』への展望	単	2011年09月	「たのしい体育・スポーツ」2011年9月号	4人の女性アスリートに聞き取り調査を実施し、今日のアスリートが置かれている現状(雇用条件、練習環境、社会とのつながりなど)を明らかにした。その結果を踏まえて、文部科学省の「スポーツ立国戦略」や「スポーツ基本法」において提案されているトップアスリートの技能や経験と、地域でのスポーツ活動の『好循環』を実現するために、大学が拠点となって、地域で展開されている個別の取り組みを統合し、現場からモデルを提案していく必要性を提起した。
11. 運動会・体育祭の教育価値-体育祭が「自治」を生み出すしくみ-	単	2010年03月	「たのしい体育・スポーツ」2010年3月号	体育祭の学校文化としての特徴を整理し、体育祭の教育的価値を「自治」という観点から検討した。その結果、①約1ヶ月という限定された準備期間に取り組むことにより、凝縮された形で自治的な活動や達成を実感しやすい②多彩な種目に加え、応援など多様な出番があり、それぞれの役割に独自のやりがいがある③期間限定の濃密な先輩後輩関係、伝統として引き継がれる自治的な運営などの特徴=教育価値があるということが明らかになった。
12. GER合併の喘息で加療を受けていた症例に関する一考察	共	2009年02月	武庫川女子大学紀要 自然科学編	田中繁宏・中村哲士・中西匠・山下絵里・岡本美穂・高村竜一郎・太田剛弘・相澤徹・伊達萬理子・櫻塚正一 GERと喘息の因果関係は、依然としてはっきりとしていない実情がある。今回は、我々が経験した症例の提示と、最近の報告例とをあわせ考察するものである。GER関連喘息で年齢が如何に関わっているのかの研究が、治療や原因解明に重要だと考えられた。さらに、今後は、年齢に加え、民族特異性なども含めた検討が必要である。
13. 最近の成人麻疹感染症に関する一考察	共	2009年02月	武庫川女子大学紀要 自然科学編	田中繁宏・濱屋桃子・村川増代・山本彩未・中西匠・中村哲士・伊達萬理子・永田隆子・櫻塚正一 先行研究、メディア、厚生労働省感染センターなどの情報をもとに、麻疹に関する近年の状況把握を行うことを研究目的とした。麻疹ワクチン接種は2回以上でほぼ100%抗体産生されるようであるが、わが国の2008年度の接種率は満足な数値とは言えず、局所流行の可能性が危惧される。現時点の対処方法は、発症状況に即した判断が必要とされる。
14. スポーツの主体者形成論の今日的課題-	単	2009年02月	「たのしい体育・スポーツ」2009年	本稿ではスポーツの主体者像を「運動文化の継承・発展、あるいは変革・創造にない手」ととらえ、「クラブ」のありようを中心に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
クラブ論を中心にー			2月号	以下のように今日の課題を提起した。第一に、総合型地域スポーツクラブを実践的に位置づけることによって学校と地域の間の壁を多様な形で乗り越えることが可能になる。第二に、これまでのクラブ像を今日のスポーツ環境の変化を踏まえて変革していくこと。以上である。
15. 保健学習の内容に関する要望ー女子大学生を対象とした調査からー	共	2009年02月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編	松本裕史・中西匠 本研究では教職科目を履修する女子大学生を対象として保健の学習内容に関してどのような時期に、どのような内容を教育してほしいかといったような要望を調査した。その結果、小学校5年次には虫歯や歯周病、けがの防止、交通安全、高校3年次には保健・医療機関に関する内容など、発達段階に応じて要望事項が異なることが明らかとなった。さらに、この内容の傾向は、学習指導要領が示す各学年の学習内容とほぼ一致していた。
16. 授業「キャンプ実習」に関する研究(4)ー4ヶ年の基礎研究と総合評価ー	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編	中村哲士, 保井俊英, 會田宏, 小柳好生, 中西匠, 永田隆子, 田中繁宏, 西坂珠美, 松岡紗也香, 野老稔 4ヶ年の比較と総合評価をおこなった。目標は、各実習に存在する最大公約数の解明である。1. 実習への取り組み方に学年差が生じた。2. 自覚せねばならぬ一様性の検討と時間確保が課題とされた。3. 因子分析は、「相互指導と配慮」「公平と民主」「触発と参加意欲」「積極的な協力と工夫」「楽しさの共有」「自己管理と健康状態」の6要因を抽出した。4. 天候による影響をコントロールする困難性が顕在化した。
17. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究	共	2007年03月	平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書	森敏生, 海野勇三, 田中新治郎, 石田智巳, 中瀬古哲, 新谷士郎, 坂本桂 さまざまな事例や対象を通してカリキュラム開発の取り組みを分析、総合することによって、自立的なカリキュラムマネジメントを実践的にすすめていくための理論的な枠組みを構築した。中西は、中学の水泳合宿の事例をもとに、教科外体育の教育的意味とカリキュラム構成のための実践課題を導いた。
18. 体育科教育学における活動システム論の検討	共	2006年12月	日本教科教育学会第32回全国大会 日本教科教育学会全国大会論文集	森敏生, 石田智巳, 中西匠, 中瀬古哲, 田中新治郎, 丸山真司, 海野勇三 体育科教育の目標・内容論を再構築する理論的枠組みとして活動システム論の有効性を検討した。体育科教育への活動システム論の展開として、体育科教育が追及すべきスポーツ活動の動機・目的として「ともにもうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意味を問い直す」と定式化し、これらの動機・目的と、その活動が獲得すべきスポーツ文化の内容を全体的にイメージ化し、提起した。
19. 採用試験が変われば教師も変わる	単	2006年03月	大修館書店 体育科教育	今日の教員採用試験が、本当に教員にふさわしい人物を採用するのにふさわしいものになっていないという問題意識のもと、採用試験の改革の視点として、①教員養成・採用を大学と教育委員会の共同作業にする②条件付採用制度を活用する③研究・実践テーマを評価する④部活動の位置づけを明確にするの4点を提案した。
20. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究ーカリキュラムにおける「経験」概念の検討ー	共	2005年11月	日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会予稿集	田中新治郎, 森敏生, 海野勇三, 丸山真司, 中瀬古哲, 中西匠, 石田智巳 指導要領の改訂作業の中で「経験」という観点が新たに提示されたことに着目し、この観点の先にどのような改革の道があるのかを検討した。体育科における運動文化やからだに対する学びが探求的行為や参加、協同行為となる道を開くものとなる可能性について論及した。
21. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究ー佐々木賢太郎の初期の体育カリキュラムに与えた影響ー	共	2005年11月	日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会予稿集	石田智巳, 森敏生, 田中新治郎, 中瀬古哲, 丸山真司, 海野勇三, 中西匠 戦後の教育改革期に生活綴方運動を体育教師として担った佐々木賢太郎の初期の実践「バレーボール」とその後の「生産」に関する教育関係の資料が、佐々木の体育カリキュラムにどのような影響を及ぼしたのかについて考察した。
22. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究	共	2005年11月	日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会予稿集	森敏生, 中瀬古哲, 中西匠, 石田智巳, 田中新治郎, 丸山真司, 海野勇三 実践をベースに自主的・自律的に中学校の体育カリキュラムの開発

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
<p>－中学校における自主的なカリキュラム開発過程の事例分析を中心に－</p> <p>23. 学校スポーツの「正当化」問題とスポーツ指導要領の開発プロセス－特にノルトライン・ヴェストファーレン州のスポーツ指導要領開発に着目して－</p>	共	2005年11月	日本スポーツ教育学会第25回記念国際大会予稿集	<p>に取り組んできた小山の実践を事例として、実践のあゆみに即してカリキュラム開発の様相を特徴づけ、開発されたカリキュラムの編成原理の発展について検討した。</p> <p>丸山真司、森敏生、海野勇三、中瀬古哲、田中新治郎、中西匠、石田智巳</p> <p>学校スポーツの正当化問題に触れ、その視点からNRW州におけるスポーツ指導要領の開発ぶろせすの原則的、構造的長短について明らかにした。この開発プロセスが学校スポーツ正当化に向けて批判を含む議論、情報公開、共同決定という原則にもとづいて展開されていることが確認された。</p>
<p>24. 授業「スキー実習」に関する研究Ⅴ－スキー実習における危機管理体制の確立に関する研究：その1 失敗情報収集の試み－</p>	共	2003年04月	武庫川女子大学教育研究所 研究レポート 30号	<p>（會田宏・野老稔・相澤徹・中西匠）□スキー実習における失敗事例の具体的描写から、危機管理体制確立のための手がかりを得ようとした。担当部分では、初心者を対象とした実習中に起こったインシデント（実習運営に支障のある失敗）の事例について、事象、原因、対処、失敗の進行と心理描写という枠組みで描写した。総括として、「指導者必携スキー実習グレンデマップ」のようなマニュアルの作成を提案した。担当（pp.95～99）</p>
<p>25. 体育科教育における課題解決学習と課題解決能力の育成</p>	共	2002年04月	平成11・12年度 文部科学省 科学研究費 報告書 (B) 11480013	<p>森敏生・海野勇三・丸山真司・中瀬古哲・中西匠</p> <p>第4章「体育科教育における課題追求の総合性」を担当。体育学習の領域構造論を学びながら、スポーツ文化実践の全体像を体育で学習する際の課題領域を以下のように総合的なものとして提起した。第一に、当該のスポーツの目的や課題に沿って問題を解決する領域。第二に、当該スポーツを共有している人間関係、社会的関係において生じる合意形成に関する領域。そして第三に、スポーツが成り立つ社会的環境や条件との関わりに生じる問題を解決する領域である。担当（pp.63～72）</p>
<p>26. スポーツ観形成と「体育理論学習」の実践課題</p>	単	2001年08月	「たのしい体育・スポーツ」 創文企画 2001年5月号	<p>体育の授業実践でスポーツの主体者形成を目的にするならば、体育理論学習ではスポーツ観の形成が重要な課題になるということを提起した。そして、小・中・高等学校における「体育理論」の実践報告の文責を踏まえて、「体育理論学習」の実践課題として、以下の4点を提起した。①スポーツの学習に関する情報を蓄積し、配信すること②認識の体系化の見通しを立てること③学びの必然性を明らかにし、子どもの価値観を揺さぶること④子どもが自分の考え方を自覚する手続きを用意すること、以上である。全（pp.32～35）</p>
<p>27. 体育の教授－学習活動における共同的な課題の追求過程</p>	共	2001年03月	日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集	<p>森敏生・海野勇三・丸山真司・中瀬古哲・中西匠</p> <p>教授－学習活動を教師と子どもとの相互主体的な活動と捉え、その中で課題が共同的に探求され、その内容が創造的に決定されるプロセスについて論じた。その結果次の諸点が明らかになった。□第一に、相互主体的で課題探求的な教授－学習活動においては「問い」の内容とその体系はきわめて重要な意義を持つ。第二に、問題状況から課題が作り出される過程は、相互主体的な4つの局面から成る。第三に、授業実践の教科内容や実践テーマについての教師の問題意識や見通しは、創造的な教授－学習活動に不可欠である。</p>
<p>28. 小学生のための「速く走るための動きづくり」</p>	単	2000年09月	「体育科教育」大修館書店 48巻6号	<p>小学生を対象として短距離指導を行なう際の基本的考え方について、「動きづくり」に焦点をあてて以下の3点を提起した。①短距離走のような指導では、動きを再構築していくプロセスが特に重要になる。そのためには、意識焦点の限定と多様なフィードバックを行なう必要がある。②4年生までは、うごきづくりを直接の目的としたドリルは無意味である。③高学年では、動きの大きさ・正しさ・速さに焦点づけたドリルを行なうと効果的だが、同時に自分の走り进行分析すること、テンポ走などで動きを意識して走ることで、リレーなど工夫して楽しく行なうこと。</p>
<p>29. 開かれた部活動を実現するには－堺市の合同部活動を例に－</p>	単	2000年04月	「体育科教育」大修館書店 48巻6号	<p>堺市で試みられている合同部活動の実態調査をもとに、開かれた運動部活動を実現するための実践課題について検討した。その結果、</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
30. 授業「スキー実習」に関する研究Ⅱ	共	2000年03月	武庫川女子大学教育研究所研究レポート 24号	<p>合同部活動は、スポーツの組織・運営能力の育成に関わる豊かな教育内容を含んでおり、部活動の将来像として大きな可能性をもっていることが明らかになった。□可能性を実現するための実践課題として、（１）行政の手続き的なバックアップや予算的な裏付け（２）参加者全員の合意形成（３）「ブロック制」の実現の3点を提起した。</p> <p>野老、島田、二宮、會田、中村、中西 スキー初心者指導のストックワーク指導の位置づけと具体的な方法論を明らかにすることと、スキー技術のビデオ評価の可能性を探ることを研究課題とした。ストックワーク指導の早すぎる導入は、技術向上遅延や一時的技術混乱を招く可能性が高く、板の操作に余裕が持てるようになった上で、導入することが望ましいと結論した。ビデオによる技術評価は、個体評価順位の一致や複数の第三者評価の一致から、可能であると推論した。（Ⅱ. スキーの初心者におけるストックワークの指導担当）担当（pp. 83～95</p>
31. 授業「スキー実習」に関する研究Ⅰ	共	1999年12月	武庫川女子大学教育研究所研究レポート 23号	<p>野老、島田、二宮、會田、中村、中西、梅崎、田嶋 スキー実習におけるグループ・ローテーション指導に関する一連の研究を、手引書という形で再構成して総括した。手引書という形で総括することにより、（１）グループ・ローテーション指導の方法論上の諸問題をより一般的な形で提示すること、（２）われわれと問題意識を共有する第三者が、グループ・ローテーション指導を実施すること、（３）グループ・ローテーション指導を、スキー実習の方法論として洗練化させることを意図した。（Ⅳ. スキー実習におけるグループ・ローテーション指導の導</p>
32. スポーツの主体者形成と体育の実践課題ートレーニング実技（ジョギング）の授業を手がかりにー	単	1999年11月	武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集	<p>授業「トレーニング実技ジョギング」を手がかりに、スポーツの主体者形成を目的に据えた体育授業の実践課題として、以下の3点を提案した。（１）スポーツの条件や組織に関する要因に関する体系的な知識の獲得が不可欠である。（２）獲得した知識を具体的に体験してみるといった演習形式の授業方法を取ることににより、豊かな学びが保証される。（３）学習のまとめとして、実施プログラムとして学習内容を再構成することにより、学習者は知識を行動の指針とすることができる。全（pp. 347～358）</p>
33. 体育学科スキー実習と学友会スキーの学生評価（２）ー満足感を構成する要因の比較ー	共	1999年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 46巻	<p>中村哲士・會田宏・野老稔・中西匠・水田英男 スキー実習と学友会スキーを、満足感の構成要因と満足感に影響を及ぼす要因について比較した。その結果以下の3点が明らかになった。①両実習ともに学生から非常に高く評価されていた。目的・目標の認識レベルにおいてはスキー実習の方が高かった。②ゲレンデ講習での指導、仲間との交流、実習からの触発・参加意欲の3要因は両者に共通する満足感構成因子である。③学友会スキーの満足感に貢献するものは「学習会スキーからの触発・参加意欲」であった。担当（pp. 73～81）</p>
34. 体育学科スキー実習と学友会スキーの学生評価（１）ー動機・期待・満足度の比較ー	共	1999年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 46巻	<p>中村哲士・野老稔・中西匠・會田宏・水田英男 学外実習科目としての「スキー実習」と、学生が自主的に運営する学友会主催の「学友会スキー」を、参加者の動機・期待・満足度という観点から比較した。以下の3点が明らかになった。①スキー経験量と事前学習量は、両者の間に大きな差はなかった。②スキー実習ではスキーに関する直接的動機によって、学友会スキーでは人的交流による楽しみという動機によって参加の意思決定をしている。③技術向上が満足感を刺激し、継続意思へと反映していると推察される。担当（pp. 65～72）</p>
35. スキー実習におけるグループ・ローテーション指導の効果について（２）	共	1999年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 46号	<p>中西匠・二宮恒夫・行森光・會田宏・野老稔 体育科のスキー実習を対象とした一連の研究の第二報。グループローテーション指導（以下GR指導）が、中級者においても効果的に展開できるかどうかを実験授業を行なって検証した。その結果、以下の2点が明らかになった。①技能レベルが高い学習者を対象にした方が複数の指導者による多様な助言や指導を効果的に受けることができる。②年齢に差のある指導者群においてもGR指導は効果的に展開することができ、コミュニケーションの深まりにも有効であ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
36. スキー実習におけるグループ・ローテーション指導の効果について	共	1998年03月	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編 45巻	る。担当 (pp.55~63) 中西匠・會田宏・野老稔・塩満勝磨 指導者がグループを組んで行なうグループ・ローテーション指導の効果を明らかにするため、スキー実習において実験授業を行なった。その結果、この指導方法は以下の諸点で効果があるということが明らかになった。①学習者に多様なことばかけ情報を、全講習を通じて提供し続けることができる、②新鮮感、指導者とのコミュニケーションの広がりを保証する、③指導者どうしのコミュニケーションが深まる。(pp.73~82)
37. スキー実習における授業評価の構造	共	1998年03月	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編 45巻	會田宏・中西匠・野老稔・二宮恒夫 本学体育学科スキー実習において、授業に関するアンケート調査を行った。その結果、学生はスキー実習のもつ授業成果のさまざまな点を高く評価していること、受講の満足感は①実習からの触発・参加意欲、②技術向上、③グレンデ講習での指導、⑤仲間との交流、④講義・教材の5つの因子によって構成されていること、特に①②③の要因について高い評価を受けるような授業展開が、充実した実習に重要であることなどが明らかになった。(pp.49~55)
38. 授業「スキー実習」の臨床教育学的研究Ⅱ	共	1998年03月	武庫川女子大学教育研究所研究レポート 20号	野老稔・島田博司・二宮恒夫・會田宏・中西匠・加林博 スキー実習における初心者指導においてグループ・ローテーション指導が効果的であるかどうかを、実験授業の結果から検討した。その結果、初心者にとって、①技能習熟に関する情報を多様な表現で得ることができる、②どの講習も新鮮な気持ちで受講することができる、③多くの教師とコミュニケーションをとることができるという3点で効果的な指導方法であるということが明らかになった。(IV初心者指導におけるグループ・ローテーション指導の試み担当) (pp.60~77)
39. 文部省「部活動調査」から見えること	単	1997年06月	体育科教育 大修館書店 45巻 7号	96年10月に発表された、文部省「中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査」の結果を、運動部活動の現状や将来像に対する子ども、親、教師の意識に焦点を当て分析した。その結果、①学校文化としての部活動の枠組みは解体せず、外に対してオープンなものへと質的な転換を図っていく②部員たちが活動内容、方法を自己決定できるように、またそれを実感できるように活動を見直すという2点を、部活議論の今後の課題として提起した。全 (pp.20~23)
40. ルールが変わればスポーツは変わるーラグビーとアメリカンフットボールの比較からー	共	1996年10月	体育科教育、大修館書店 44巻 12号	岨和正・中西匠 小学校6年生を対象とした実験的実践。ルールが変わればスポーツは変わるということをラグビーとアメリカンフットボールの文化的背景、ルールの違い、ゲーム様相の違いを比較することによって教えようとした。その結果、スポーツにおける国民性というレベルには至らなかったものの、子どもたちはルールとゲーム様相の相互前提的關係を具体的な経験を通じて体系的に認識することができた。(pp.62~66)
41. 部活高校生の考え方・生き方ー全国版「高校生の部活動に関する調査」から(1)ー	単	1996年02月	「体育科教育」大修館書店 44巻 2号	1995年に実施した「高校生の部活動に関する調査」の結果の分析を通して、今日の高校部活動の形成力として以下の諸点を提起した。①共通の目標をもった異年齢集団と具体的な実体験をもとにした自己実現の場となっている。②部活群は部活動と勉強などの両立を求めている悩みや葛藤を通して自己を前向きに形成している。③部活動高校生は自分自身の問題としては無償性の文化としてスポーツをみており、それを行動原理として部活を行っている。(pp.61~63)
42. 女子大学生の発達課題と大学体育の教育内容	共	1995年12月	広島女子大学生生活科学部紀要 1号	中瀬古哲・中西匠 本研究では、「地域スポーツの主体者形成」と「女子大学生のスポーツ観」という二側面から大学生の発達課題について考察した。その結果、大学体育の教育内容構成にむけ、以下の点が明らかになった。①スポーツについての無権利状態の自覚こそが大学生の発達課題である。②無権利状態の克服のための知識・実践的力量・意欲の形成が教育内容構成の重要な視点となる。③授業改革のモデルとして、フィールドワーク形式の授業が考えられる。(pp.119~121, pp.126~128)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
43. 生涯スポーツの発展と体育の教科内容(2) - 「自主クラブ」の実態調査を通して -	単	1995年03月	教育学研究紀要(中国四国教育学会) 40巻第2部 389-394頁	本研究では、鹿児島市民体育館で養成された「自主クラブ」の実態調査の分析結果をもとに、学校体育の実践的課題と教育内容・方法について検討した。その結果、このプログラムは、スポーツクラブを①機能的なものではなく、活動内容に広がりを持ったゆるやかな生活集団として、②民主的、合理的な組織・運営形態を持つものとして、③クラブ活動を広がりとし継続性をもって発展させる契機をもつものとして育成するのに有功であるということが明らかになった。合わせて学校体育の枠組みでのプログラムの再構成の必要性を提起した。
44. 公共スポーツ施設のスポーツクラブの実態について - 鹿児島市民体育館の場合 -	単	1995年03月	広島中央女子短期大学紀要32巻21-32頁	本研究では、鹿児島市民体育館で養成された「自主クラブ」の実態調査をもとに検討した。その結果①クラブ会員にとっては「クラブ」で行うことじたいがスポーツ参加の主要な要因でありその意義を人間的交流に見出している。②プレイに関係する組織的活動については必要性を認め実際に行っている。③「きびしさ」「努力」よりも「やさしさ」「その場の楽しさ」を求める傾向がある④行政に対しては、施設・設備などへの要求は強いが、ソフト面でのサービスについては期待していない、などの特徴が明らかになった。
45. 大学における体育理論の教育内容構成について - 大学用テキストの分析を通して -	共	1994年12月	広島女子大学家政学部紀要30号103-105頁	中瀬古、中西 本研究では、大学の体育理論のテキストの分析を通して、大学体育理論の内容構成について検討した。その結果、①「健康」と「スポーツ」というタイトルが「保健体育」に取って代る傾向があり、生物学的な人間理解と、文化レベルのスポーツ理解という二つの潮流の分化と統一の過程にある②具体的な記述内容から析出されるスポーツ把握は、身体形成の手段としてのスポーツ把握、プレイ論的スポーツ把握、現状否定型スポーツ把握、権利論的スポーツ把握などに類型化できることが明らかになった。(pp.103-104, pp.113-115)
46. 生涯スポーツの発展と体育の教科内容 - スポーツ教室におけるスポーツクラブ養成システムの検討を通して -	単	1994年03月	教育学研究紀要(中国四国教育学会) 39巻第2部 342-347頁	本研究では、鹿児島市民体育館のスポーツクラブ養成システムを分析し、行政主催の「スポーツ教室」による自主クラブ養成システムをモデルに学校体育の教科内容・枠組について検討した。その結果、①クラブ育成のための導入期・経過期・定着期にいたるプログラムを学校体育にも導入する必要がある、とりわけこれまでぬけていた経過期の位置づけが極めて重要②認識内容の一般化、体系化を指向する「理論学習」の充実、という二点を学校体育の枠組みの再検討を含む課題として提起した。
47. 子どもの認識発達とスポーツ観の形成過程	単	1992年03月	広島大学教育学部紀要第2部133-139頁	本研究は、スポーツ観の形成を、認識発達と教育的働きかけの関連で構想する枠組みを提示することを目的とした。その結果、スポーツ観の形成過程は、①認識対象が法則化、体系化する系と、②認識対象が時間的、空間的に拡大していく系が①の系のらせん的往復運動を繰り返しながら②の系にそって(発達段階に応じて)時間的、空間的に拡大し、広がりをもった像として結実するものとしてモデル的に提示した。
48. 音楽科における授業方法に関する一考察 - 「カノン」の授業の教授学的分析を通して -	共	1991年03月	教育方法学研究16巻147-156頁	高須、三村、中西 本研究では、小学校4年生を対象とした「カノン」の授業を、一般教授学的な分析枠組で分析することを通して、音楽科固有の授業方法論として、以下の諸点を提起した。①音楽科では子どもの反応が多様であるが、それに対応する発問とその応答の予想②音楽的事象・現象による学習内容・教材の配列とヤマ場の設定③音楽的活動によって必然的に生み出される小集団の教授学的再編④音楽固有の学習規律の確定⑤教師の指導行為(タクト)の分析(pp.147-156)
49. 中学生の「体育理論」学習に関する研究 - 子どものスポーツ観におよぼす影響	単	1990年03月	広島大学大学院教育研究科博士課程論文集15巻188-195頁	本研究は、中学2年を対象とした「体育理論」の授業が子どものスポーツ観に及ぼした影響について縦断的な調査によって明らかにしようとしたものである。その結果、全体的傾向としては、授業の影

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
を中心にー				響は一定期間をおいても消えず、子どものスポーツに関する考え方として定着しているということが推察された。また、個人レベルの変容の検討からも同様の傾向が見られ、「体育理論」は中学2年という段階において一定の成果をあげることができると結論づけた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 体育授業における豊かな学びへの活動理論的アプローチ（ラウンドテーブル）	共	2016年07月10日	日本体育科教育学会 第21回大会	加登本仁 森敏夫 丸山真司 中瀬古哲 中西匠 活動理論、とりわけエンゲストロームの活動システム論や拡張的学習論の先駆者である山住勝広氏（関西大学文学部教授）による「教育実践研究への活動理論的アプローチの可能性」報告を受けて、提案者から活動理論を分析枠組みとした体育授業研究の事例を2題報告した。それらの報告を受けて、体育授業研究における活動理論の可能性について参加者とともに議論した。
2. ドイツにおける学校スポーツカリキュラム開発とBewegte Schule	共	2009年10月		丸山真司, 森敏生, 海野勇三, 中瀬古哲, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 ドイツの学校スポーツカリキュラム開発におけるBewegte Schuleの位置づけと役割について検討した。
3. ドイツにおける教師によるスポーツ指導要領の評価	共	2007年09月		丸山真司, 森敏生, 海野勇三, 中瀬古哲, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 ドイツにおける教師によるスポーツ指導要領評価のあり方やその方法（質問調査）について考察した。①教師によるスポーツ指導要領評価の研究にむかうスタンス②指導要領改訂作業のプロセス③指導要領の調査方法（質問調査）に関わって、多くの示唆を得た。
4. 体育科教育における「社会的発達」の位置づけに関する基礎的考察	共	2007年09月		中瀬古哲, 森敏生, 丸山真司, 海野勇三, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 体育科教育における子どもの「社会的発達」に関する議論を再検討し、体育科固有の「陶冶」と「訓育」の統一的理論構築に向けての基礎的考察をおこなった。近年進められている、スポーツマンシップ、授業規律、徳目などを内容とするプログラム開発にたいする批判的検討をおこなった。
5. 体育科教育における身体形成論に関する基礎的考察	共	2007年09月		森敏生, 丸山真司, 海野勇三, 中瀬古哲, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 体育科教育における身体形成論の論点整理をはかり、これまでの基本的争点である「身体形成か、運動文化の学習か」という理論的に効対立と実践的 pursuit の振り子現象を乗り越える基礎的考察を試みた。
6. 体育科教育における「社会的発達課題」の位置づけと内容	共	2006年12月		中瀬古哲, 森敏生, 中西匠, 石田智巳, 田中新治郎, 丸山真司, 海野勇三 体育科教育において、子どもの「社会的発達課題」を意図的・計画的な教授-学習活動に位置づけるための条件及び課題について考察した。その結果、数値化を前提とした「人格の内容」や「社会的スキル」は体育科固有の教科内容になりえない。「社会的発達課題」は、長期のスパンで、単元・教材統弾的にかつ生活指導（集団づくり）との関連において把握されねば効果は期待できないということが示唆された。
7. 体育科教育学における活動システム論の検討	共	2006年12月		森敏生, 石田智巳, 中西匠, 中瀬古哲, 田中新治郎, 丸山真司, 海野勇三 体育科教育の目標・内容論を再構築する理論的枠組みとして活動システム論の有効性を検討した。体育科教育への活動システム論の展開として、体育科教育が追及すべきスポーツ活動の動機・目的として「ともにもうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意味を問い直す」と定式化し、これらの動機・目的と、その活動が獲得すべきスポーツ文化の内容を全体的にイメージ化し、提起した。
8. 就学前体育におけるボールゲームのカリキュラム開発と組織協同-「的あてゲー	共	2006年08月		中瀬古哲, 森敏生, 海野勇三, 丸山真司, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 幼児を対象としたボールゲームの体育実践の事例を通して、カリキュラムマネジメントの自己創出性解明に向けての基礎的知見を得

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ム」を中心とした協同実践研究を通して-				ようとした。その結果以下の示唆を得た。①ボールゲームは、幼児の社会的発達課題の顕在化、課題解決に有効な機能を有する②教材・教科内容の理解には、実技研修と共同実践分析が重要である③組織共同のためには、開発・設計・制御の全ての局面における水平的関係の構築・維持が重要である。
9. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究-カリキュラムにおける「経験」概念の検討-	共	2005年11月		田中新治郎, 森敏生, 海野勇三, 丸山真司, 中瀬古哲, 中西匠, 石田智巳 指導要領の改訂作業の中で「経験」という観点が新たに提示されたことに着目し、この観点の先にどのような改革の道があるのかを検討した。体育科における運動文化やからだに対する学びが探求的行為や参加、協同行為となる道を開くものとなる可能性について論及した。
10. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究-佐々木賢太郎の初期の体育カリキュラムに与えた影響-	共	2005年11月		石田智巳, 森敏生, 田中新治郎, 中瀬古哲, 丸山真司, 海野勇三, 中西匠 戦後の教育改革期に生活綴方運動を体育教師として担った佐々木賢太郎の初期の実践「バレーボール」とその後の「生産」に関する教育関係の資料が、佐々木の体育カリキュラムにどのような影響を及ぼしたのかについて考察した。
11. 体育科教育におけるカリキュラムマネジメントに関する研究-中学校における自主的なカリキュラム開発過程の事例分析を中心に-	共	2005年11月		森敏生, 中瀬古哲, 中西匠, 石田智巳, 田中新治郎, 丸山真司, 海野勇三 実践をベースに自主的・自律的に中学校の体育カリキュラムの開発に取り組んできた小山の実践を事例として、実践のあゆみに即してカリキュラム開発の様相を特徴づけ、開発されたカリキュラムの編成原理の発展について検討した。
12. 学校スポーツの「正当化」問題とスポーツ指導要領の開発プロセス-特にノルトライン・ヴェストファーレン州のスポーツ指導要領開発に着目して-	共	2005年11月		丸山真司, 森敏生, 海野勇三, 中瀬古哲, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳 学校スポーツの正当化問題に触れ、その視点からNRW州におけるスポーツ指導要領の開発ふるせすの原則的、構造的長短について明らかにした。この開発プロセスが学校スポーツ正当化に向けて批判を含む議論、情報公開、共同決定という原則にもとづいて展開されていることが確認された。
13. 紀南作教の体育教師佐々木賢太郎Ⅱ-「体育の子」時代の体育実践の特徴-	共	2004年10月		石田智巳, 森敏生, 海野勇三, 中瀬古哲, 中西匠, 田中新治郎
14. 体育科におけるグループ学習論の生成過程-体育カリキュラム開発との関係を中心に-	共	2004年10月		田中新治郎, 石田智巳, 海野勇三, 中瀬古哲, 中西匠, 森敏生
15. 就学前体育における教授-学習活動と組織的協同の諸相-保育者・園長と研究者の連携を中心に-	共	2004年10月		中瀬古哲, 森敏生, 海野勇三, 田中新治郎, 中西匠, 石田智巳
16. 体育の教授-学習活動における共同的な課題の追求過程	共	2000年11月		森敏生・海野勇三・丸山真司・中瀬古哲・中西匠 教授-学習活動を教師と子どもとの相互主体的な活動と捉え、その中で課題が共同的に探求され、その内容が創造的に決定されるプロセスについて論考した。その結果次の諸点が明らかになった。□第一に、相互主体的で課題探求的な教授-学習活動においては「問い」の内容とその体系はきわめて重要な意義を持つ。第二に、問題状況から課題が作り出される過程は、相互主体的な4つの局面から成る。第三に、授業実践の教科内容や実践テーマについての教師の問題意識や見通しは、創造的な教授-学習活動に不可欠である。
17. 体育科教育における課題解決学習と課題解決能力-関係シス	共	1999年11月		森・海野・丸山・中瀬古・中西 体育科教育における「課題解決学習」と「課題解決能力」の解明にむけ、研究方法論を検討し、新たな仮説モデルを提起した。□ここ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
テムへの複合的アプローチ				では、集団の共同的な学習と、ここの課題解決行為は、「機能」「構造」「意味」の3次元を持つ相互関係システムを構成するという前提的考察の後、「課題解決行為」「共同的な学習」「課題解決能力」の3つの考察対象を、「仮説演繹法」「観察帰納法」「意味解釈法」をいう3つの認識方法による複合的アプローチによって解明していくことの意義と方法を提起した。
18. 生涯スポーツの発展と体育の教科内容(2) - 「自主クラブ」の実態調査を通して -	単	1993年11月		本研究では、鹿児島市民体育館で養成された「自主クラブ」の実態調査の分析結果をもとに、学校体育の実践的課題と教育内容・方法について検討した。その結果、このプログラムは、スポーツクラブを①機能的なものではなく、活動内容に広がりを持ったゆるやかな生活集団として、②民主的、合理的な組織・運営形態を持つものとして、③クラブ活動を広がりとし継続性をもって発展させる契機をもつものとして育成するのに有功であるということが明らかになった。合わせて学校体育の枠組みでのプログラムの再構成の必要性を提起した。
19. 生涯スポーツの発展と体育の教科内容 - スポーツ教室における自主クラブ養成システムの検討を通して -	単	1992年11月		本研究では、鹿児島市民体育館のスポーツクラブ養成システムを分析し、行政主催の「スポーツ教室」による自主クラブ養成システムをモデルに学校体育の教科内容・枠組について検討した。その結果、①クラブ育成のための導入期・経過期・定着期にいたるプログラムを学校体育にも導入する必要があると、とりわけこれまでぬけていた経過期の位置づけが極めて重要②認識内容の一般化、体系化を指向する「理論学習」の充実、という二点を学校体育の枠組みの再検討を含む課題として提起した。
20. 体育科教育における人格形成論(V) - 体育授業における「練習計画づくり」の意義と課題について -	単	1991年11月		本研究では、体育授業において「練習計画づくり」を題材として教授-学習活動を展開する意義を、スポーツの主体形成という観点から以下の3点を提起した。①「練習計画づくり」を中核とした認識過程は、主体の実践に緊密に結びついており、実践的認識を形成する契機になる。②具体的な目標にむけて、スポーツ活動に必要な諸要因を構造的(体系的)に認識することができる。③組織や社会的条件と結びつけてプレイ場面を認識することができる。
21. 子どもの認識発達とスポーツ観の形成過程	単	1991年10月		本研究は、スポーツ観の形成を、認識発達と教育的働きかけの関連で構想する枠組みを提示することを目的とした。その結果、スポーツ観の形成過程は、①認識対象が法則化、体系化する系と、②認識対象が時間的、空間的に拡大していく系が、①の系からせんじ往復運動を繰り返しながら②の系にそって(発達段階に応じて)時間的、空間的に拡大し、広がりをもった像として結実するものとしてモデル的に提示した。
22. 音楽の授業における概念形式と表現に関する研究 - 「カノン」の授業の教授学的分析を通して -	共	1990年09月	高須、三村、千成、中西	本研究では、小学校4年生を対象とした「カノン」の授業を、一般教授学的な分析枠組で分析することを通して、音楽科固有の授業方法論として、以下の諸点を提起した。①音楽科では子どもの反応が多様であるが、それに対応する発問とその応答の予想②音楽的事象・現象による学習内容・教材の配列とヤマ場の設定③音楽的活動によって必然的に生み出される小集団の教授学的再編④音楽固有の学習規律の確定⑤教師の指導行為(タクト)の分析 (pp. 86-87)
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
1. 第83回日本学生対校陸上競技選手権大会		2014年09月	熊谷スポーツ文化公園	個人100ハードル優勝(藤原未来)
2. 第24回関西学生対校女子駅伝競走大会		2014年09月	しあわせの村	11位(1時間49分26秒)
3. 第91回関西学生陸上競技対校選手権大会	単	2014年05月	ヤンマースタジアム長居	総合6位(65点)個人100mH優勝(藤原未来)棒高跳び優勝(竜田夏苗)2位(宮川海峰)走幅跳3位(上垣麻衣子)
4. 第82回日本学生陸上		2013年09月	国立競技場	個人棒高跳優勝(竜田夏苗)7位(宮川海峰)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
競技対校選手権大会				
5. 第23回関西学生対校女子駅伝競走大会		2013年09月	しあわせの村	10位（1時間51分06秒）
6. 第90回関西学生陸上競技対校選手権大会		2013年05月	長居陸上競技場	総合4位（68.5点）個人棒高跳優勝（竜田夏苗）2位（宮川海峰）走幅跳び2位（上垣麻衣子）円盤投2位（森下緑子）100mH3位（藤原未来）
7. 第81回日本学生陸上競技対校選手権大会		2012年09月	国立競技場	個人棒高跳3位（竜田夏苗）4×100mリレー7位
8. 第22回関西学生対校女子駅伝競走大会		2012年09月	しあわせの村	11位（1時間48分34秒）
9. 第89回関西学生陸上競技対校選手権大会		2012年05月	長居陸上競技場	総合3位（75点）個人棒高跳優勝（竜田夏苗）円盤投2位（森下緑子）100m3位（山崎布美）4×100mリレー3位 混成競技3位（国井真紀）
10. 第80回日本学生陸上競技対校選手権大会		2011年09月	熊本KKWING	個人4×100mリレー4位 棒高跳4位（竜田夏苗）
11. 第21回関西学生対校女子駅伝競走大会		2011年09月	しあわせの村	10位（1時間47分28秒）
12. 第88回関西学生陸上競技対校選手権大会		2011年05月	長居陸上競技場	総合4位（77点）個人棒高跳優勝（竜田夏苗）100m2位（松澤瑠衣）3位（岡本侑子）4×100mリレー2位 4×400mリレー2位 500mウォーク3位（稲葉頼美）
13. 第79回日本学生陸上競技対校選手権大会		2010年09月	国立競技場	個人 4×400mリレー4位 走幅跳7位（斎藤有紀） 混成競技7位（上坂麻世）
14. 第20回関西学生対校女子駅伝競走大会		2010年09月	しあわせの村	12位（1時間51分25秒）
15. 第87回関西学生陸上競技対校選手権大会		2010年05月		総合??位（64点）個人4×400mリレー2位 5000mウォーク2位（若松美歩）棒高跳3位（松田彩花）
16. 第78回日本学生陸上競技対校選手権大会		2009年09月		個人 100mハードル7位 7種競技 6位 7位 4×400mリレー 6位
17. 第62回西日本学生陸上競技対校選手権大会		2009年07月		総合5位（49点）
18. 第86回関西学生陸上競技対校選手権大会		2009年05月		総合優勝（129点） 個人 400m 1600mリレー優勝
19. 第77回日本学生陸上競技対校選手権大会		2008年09月		個人 ハンマー投3位 走高跳4位 400m7位 7種競技 6位
20. 第85回関西学生陸上競技対校選手権大会		2008年05月		優勝（25年ぶり）
21. 第60回西日本学生陸上競技対校選手権大会		2007年09月		総合5位（49点）
22. 第76回日本学生陸上競技対校選手権大会		2007年06月		個人 10000m競歩 4位 7種競技 6位 4×400mリレー 6位
23. 第91回日本陸上競技選手権		2007年06月		個人 走高跳 5位
24. 第84回関西学生陸上競技対校選手権大会		2007年05月		総合5位（68点） 個人 走高跳 優勝
25. 第75回日本学生陸上競技対校選手権大会		2006年06月		個人 100mハードル 3位 走高跳 5位
26. 第90回日本陸上競技選手権		2006年06月		個人 走高跳 6位 100mハードル 8位
27. 第83回関西学生陸上競技対校選手権大会		2006年05月		総合3位（88点） 個人 100mハードル 走高跳 優勝
28. 第58回西日本学生陸上競技対校選手権大会		2005年09月		総合6位（34.5点）
29. 第74回日本学生陸上競技対校選手権大会		2005年07月		個人 ハンマー投 7位
30. 第82回関西学生陸上		2005年05月		総合4位（75点）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
競技対校選手権大会				個人 走高跳 優勝
31. 第81回関西学生陸上競技対校選手権大会		2004年05月		総合4位（72点）
32. 第80回関西学生陸上競技対校選手権大会		2003年05月		総合6位（48点）
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本スポーツ教育学会 広島大学教科教育学会 兵庫体育・スポーツ科学学会 中国四国教育学会 日本教育方法学会 日本体育学会